

## 非典型的な組織像を呈した猫のリンパ腫の1例

○八木原絃子<sup>1)</sup> 鎌田佐知子<sup>1)</sup> 山口智宏<sup>2)</sup> 田村恭一<sup>1)</sup> 磯谷真弓<sup>1)</sup>  
小野憲一郎<sup>3)</sup> 藤田道郎<sup>1)</sup> 盆子原 誠<sup>1)</sup> 鷺巣月美<sup>1)</sup><sup>1)</sup> 日本獣医生命科学大学・臨床病理 <sup>2)</sup> 有限会社ケーナインラボ <sup>3)</sup> 東京大学大学院・臨床病理

## 【背景】

リンパ腫は、リンパ節が腫瘍性に増殖したリンパ球に占拠され、形態的に単一の細胞集団により構成されているのが一般的である。しかしながら、増殖している細胞が典型的な芽球タイプでない場合や、反応性に増殖したリンパ球が混在する場合、診断が非常に難しい。今回、病理組織学的検査において確定診断が困難であった猫のリンパ腫の一例について報告する。

## 【症例】

症例は、日本猫、10歳、雌、FeLV陽性で、体表リンパ節の腫大を主訴に日本獣医生命科学大学付属医療センターに来院した。初診時の触診で、下顎リンパ節(4cm)およびの浅頸リンパ節(1.5cm)の腫大が確認された。

## 【検査所見】

各リンパ節の細胞診では、小型リンパ球を主体とし、少数の大型円形細胞が散見された。これらの大型の細胞は明瞭な核小体を持ち、2核の細胞も認められた。下顎リンパ節のツルーカットによる病理組織学的検査では、比較的分化した形態のリンパ球の瀰漫性増殖と共に、核内に巨大な核小体を有する大型の異形細胞が散見された。B細胞マーカーである抗人CD20抗体による免疫染色の結果、主体を成す小型リンパ球は陰性を示し、少数の大型細胞は陽性を示した。クローナリティー解析には、腫大した下顎リンパ節からFNAにより採取した細胞のゲノムを用いた。猫T細胞レセプター $\gamma$ 鎖遺伝子(TCR $\gamma$ )のVおよびJ領域に対するプライマーを用いてPCRを行った結果、明瞭なバイクローナルなバンドが検出された。

## 【考察】

本症例のリンパ節では、主に小型リンパ球が増殖しており、クローナリティー解析ではTCR $\gamma$ のバイクローナルなバンドが検出された。これらの所見は高分化型リンパ腫を示唆するものであるが、本症例では小型リンパ球と共に少数の大型のB細胞が認められている。人のリンパ腫では少数の腫瘍性の大型B細胞の周囲に、反応性にT細胞が増殖するT-cell rich B-cell lymphoma (TCRBL)が知られており、まれに猫においても報告されている。本症例において、成熟T細胞と考えられるリンパ球を背景にCD20陽性の大型B細胞が散見された点は、TCRBLに類似する所見である。リンパ球が反応性に増殖した場合、まれにクローナリティー解析でモノクローナルなバンドを示すことが報告されている。今回、免疫染色では大型B細胞周囲の小型リンパ球がT細胞であることを示すことは出来なかったが、腫瘍性B細胞に反応し、特定のT細胞クローンが増殖した可能性も否定できないと考える。